（社）日本ライフストーリー研究所　2018/07/20　第 13 号

JLSR ニュースレター

沖縄と、保育者と、わたし

岩崎　美智子

わたしと沖縄との関わりは、けっこう古い。

最初に沖縄を訪れたのは 1976 年で、本土復帰したものの、まだ車が道路の右側を走っていたころである。当時女子大の社会学科に通っていたわたしにとって、「社会調査実習」は必修科目だった。「今年の調査地域は、沖縄です」と発表された時、先生の言葉にいつになく力がこもっていたことを思い出す。担当の先生は地域社会学を専門とされていたので、沖縄に対する思い入れが人一倍強かったのだろう。わたしたちのグループは「教育」をテーマとし、4 人で 3 か所の中学をまわり質問紙調査をさせてもらった。

つぎは、1985 年である。先生に連れられて、児童養護施設の調査をした。個人情報保護の観点から関係書類をコピーすることはできないので、関係書類を読み上げてテープレコーダーに録音するという方法でのデータ収集である。朝から晩まで資料を読み上げるのだが、同じ部屋で読み込みをしていた先輩とわたしの声が、互いにだんだん大きくなっていったのを覚えている。施設長が、海洋博の開催場所に案内してくれたのだが、錆びたアクアポリスで「祭りのあと」を目の当たりにした。

3 回目は、1991 年から 92 年にかけて、先輩たちに誘われて里親調査に出かけた。「里親調査」と言うと、当時は「変わったことをやってるんですね」と、不思議がられたものだ。本島では 1 件ずつ地図を頼りに里親宅を訪ね、里子受け入れが活発だった鳩間島には、胃袋がひっくり返るような揺れが続く定員 4 名の船で渡った。沖縄の里親にクリスチャンが多いことや、トートーメーの習俗によって「位牌を守る人」である男児の養子縁組が敬遠されることを知った。

その後、観光以外で沖縄を訪れたのは、2008 年のことである。保育所保育士のライフヒストリー調査を実施することになり、わたしは北海道、大阪、沖縄など 10 都道府県で 70 歳以上の元保育士たちから話を聞いた。何人もの人から話を聞くうちに、沖縄の女性たちの語りが他の地域の女性たちとは異なる熱量を持っているように感じられ、翌年からは毎年、保育所・施設保育士、児童養護施設卒園生に話を聞くため沖縄に通うことになる。

話を聞いたうちのひとり A さんは、1942 年生まれの元施設保育士だった。かつて養育を担当した卒園生が店を営んでいたものの資金繰りが厳しくなったため、彼女は、自宅の土地を担保に保証人となり、結果 300 万円ほどを肩代わりすることになった。念のため言っておくが、A さんは資産家ではない。別の卒園生である 50 代の男性に話を聞いた時に、彼は「おれが中学の頃悪さをしたら A 先生がすごく泣いたんですよ、悲しがって」、「おれは思いましたもん、もうこの人を泣かしちゃいけない、って。それからまっとうな人間になりました。」と語った。一昨年わたしの 3 回目のインタビューに応じてくれた A さんは、昨年世を去った。

B さんは、4 年前に定年退職した元施設保育士である。保育を学んでいた 20 歳のころ、実習先である障がい児施設の玄関で挨拶をしていると、小学校高学年くらいの男の子が突然台の上にあがってプルプルプルとウンチを

した。そこへ保母さんがやってきて「あんた、これ片づけて」と命じたので、B さんはなんのためらいもなく、かばんを放り出して始末をしたそうである。また、彼女は、施設に勤務していた 7 年前、埼玉県にある会社の社長から「迎えに来い」という電話を受け、即座に卒園生を引き取りに行った。B さんはその人の養育を担当したことはなかったが、20 年前の卒園生である男性は身寄りがなく、迎えに行く人がいなかったからである。障がいをもつ彼が暮らす施設の入所手続きをすませて、B さんは沖縄に帰ってきたが、B さんに埼玉までの往復航空運賃を払ってくれた人はいない。

目の前に手助けを必要としている人がいると、自分の不利益を恐れずに行動する彼女らの瞬発力に、わたしは圧倒されてしまう。彼女らの話を聞くたび、この人たちには「かなわない」と思う。そして、なぜ保育者なのか、なぜ沖縄なのか、彼女らに魅せられてしまう答えを求めて、今年もわたしは沖縄に行く。　　（東京家政大学）

From 近江

肉職人たちが多い町（３）－屠場のある町でのフィールド調査から－　「人材融通機能」を果たしてきた“部屋”

田中政明

屠場のあるこの S 町には、肉をさばく職人たちが数多く輩出されるという特異性がみられる。それは、肉職人を再生産していく特有の仕組みがあったからではないかと推測できるのである。これについては前号のニュースレターの中で“若屋”を通して述べたが、この仕組みに関して、さらに検討を進めてみたい。

肉職人のほとんどが数軒の店を渡っているという事実がある。肉職人たちは、同じ職場に居続けるとなかなか思うように賃金があがらないという理由で、職場をかわっていく傾向にあった。店をかわることが、彼ら自身の労働価値を高めることにつながっていたのである。このような職人たちの“渡り”は、うまくいかずに途切れることも起こりうる。職場を渡っていくには、何らかの紹介や口利きが必要となる。既に実家を出てしまっている職人たちはどのようにしてこうした“渡り”を実現していったのか。

それは、肉職人の世界には、“部屋”といういったん身を寄せるような場所が存在したことによるところが大きい。**「大阪には“部屋”があった」**と語られている。こうした部屋の存在に関する語りが、３例（大阪で板場として働いていた肉職人２名と家族１名の語り）ある。部屋が大阪あるいは京都や滋賀などでも広く存在していたのなら、もっと多くの語りの中に出てきてもよさそうなものだが、そうはなっていない。実際のところ、その軒数はかなり少なかったと思われる。

大阪府の豊中市に実際あった部屋の様子を、語りに基づいて記述してみよう。

部屋には“親方”と呼ばれる家主がいる。彼は、部屋に集ってくる職人たちに、無料で食事や寝る場所も提供して、肉職人たちを抱える。

板場として長年働き、部屋にも行った経験のある男性は、**「あんまり言えんけど、よぉ遊んだわ」、「ほやけど、人間良うならんわ、遊んでるんやさかいね」**と、部屋の住人たちと連れ添ってよく遊びに行っていた当時を振り返りながら語っている。ここから、次に渡る職場が見つかるまでの猶予期間を過ごす場として部屋は機能していたことがわかる。

部屋は、肉屋に職人を紹介する、いわば口入れ屋のようなものであった。職場を求める者と職人を求める者との接点、つまり、働き口の紹介所としての役割を果たしていた。部屋の親方は、雇用する側の人たちの求人相談も申し受けた。部屋は、求人する側の要請に応えることを目的として、最初はつくられたのかもしれない。部屋にいることで、次の職への“渡り”ができたのである。様々な理由でいったん離職した職人たちにとっては、部屋は心の安寧を提供する場、いわば“雨宿り”のような空間だったのかもしれない。

部屋は、肉をさばく職人という属性にその対象を特化しており、無料で滞在できるという特徴がある。肉をさばく職人としての求職活動を支援する機能を果たすと同時に、同宿の職人との出会いやふれあいを通して、肉をさばく職人自身のスキルアップや就労への意欲をパワーアップする役割も果たしていたと言える。

これは、前号で紹介した“若屋”が、情報収集、教育、社交、そして職業訓練の場でもあったこと、肉職人を求める人に人材を弾力的に融通していく「人材融通機能」もあわせ持っていたことと酷似している。

職業安定法が 1947 年（昭和 22 年）に公布された後においても、“部屋”は現実のものとして存在していたという点で特記すべきものである。職業安定行政における職業紹介では、この業界の就労は実現できなかったことを如実に物語っている

Ｓ町では、**「このむら全部が“部屋”のようなもんや」**と語られている。この町そのものが、部屋が持つ

ところの人材融通機能を備えていたのである。
　以上検討してきたことから、前号で記した“若屋”、そしてこの町そのものが有しているこのような人材融通機能がベースにあったからこそ、この町から肉をさばく職人が多数輩出されたのだと言える。

2018 年度総会報告
（第 4 回）

第 4 回総会議事録（要約）

【日時】2018 年 6 月 24 日（日）13:30～15:30

【場所】（社）日本ライフストーリー研究所

【参加人数】出席者 11 名、委任状 26 名

１．　開会の挨拶
２．　議長に桜井厚を選出
３．　議題

(1) 第 1 号議案「2017 年度事業・活動報告」（岸）
　会員の入退会（入会者 36 名、退会者 2 名）、文献・資料の整理の状況、寄贈図書・資料、研究会（定例会 7 回）・夏期研究会（参加者 14 名）の開催、講習会（11 月参加者 14 名、3 月参加者 10 名）の開催、ニュースレター（8 号～11 号、増刊号）の発行、研究誌『語りの地平』2 号の刊行、施設利用状況（宿泊、延べ 21 名、文献貸出 2 名、研究相談 3 名）などが報告され、承認された。

(2)第 2 号議案 2017 年度決算報告・監査報告（大谷）
　2017 年度の決算と監査報告が行われ、承認された。

（1）　収入の部

項目	予算	決算	内訳
会費	320,000 円	408,000 円	会員（83 名分）
賛助会員	15,000 円	0 円	団体等
寄付金・カンパ	100,000 円	129,296 円	寄付金・カンパ
利子	150 円	11 円	ゆうちょ銀行
研究誌販売	150,000 円	96,600 円	
講習会	0 円	57,688 円	2 回開催
計	585,150 円	691,595 円	

（2）　支出の部

項　目	予　算	決　算	内　訳
総会費	10,000 円	3,516 円	年次総会
文献資料購入費	10,000 円	0 円	研究所のアーカイブ文献資料
研究誌作成費	250,000 円	310,000 円	研究誌発刊・送料等
研究会開催費	15,000 円	14,488 円	夏季研究会開催
事務用品費	10,000 円	18,981 円	文具・封筒・コピー用紙・資料整理用品等
ホームページ管理費	20,520 円	20,520 円	Xserver・ドメイン料金
通信費	20,000 円	29,580 円	切手代
研究所消耗品費	10,000 円	103,879 円	カーテン・冷蔵庫・BQQ コンロ・日用品座椅子等
研究所維持費	120,000 円	156,115 円	水道光熱費・インターネット代金など
会議費	90,000 円	59,630 円	運営委員会の交通費補助
年会費	3,000 円	3,000 円	社）水俣病センター相思社
税　金	21,000 円	21,000 円	法人税
予備費	5,630 円	0 円	
計	585,150 円	740,709 円	

収支　収入合計 691,595 円－支出合計 740,709 円=　▲49,114 円

注：赤字分は「設立者基金」の寄付により補填

(3)第3号議案　2018 年度　事業・活動計画
　前年度に引き続き、会員の拡大を図ること、文献・資料の整理、収集（「部落生活文化史調査」の資料、「中野卓調査資料、災害関係資料など、水俣病関係資料（色川文書など）、ホームページと Facebook の充実と活用（資料のデータアーカイブスを構築し、所蔵文献資料を紹介）. 研究会（定例研究会、夏期研究会）の継続開催、. 講習会（受講費：会員 3,000 円・非会員 4,500 円、第 3 回：7 月 8 日、第 4 回：11 月 11 日、第 5 回：3 月 24 日）の開催、ニュースレター（4 回）の発行、研究紀要『語りの地平－ライフストーリー研究』第3号発行 11 月予定、調査の実施、また研修会への講師派遣や研究相談（3,000 円／回）の実施、施設利用（宿泊：会員 500 円、非会員 1,000 円）の促進などが提案され、承認された。なお、会員は、所属先として本研究所研究員を名乗ることができることが再確認された。メール配信でも良い会員にはニュースレターのメール配信すること、J-stage サービスの利用申込みをすることなどが承認された。

(4)第 4 号議案 2018 年度予算について
　2018 年度の予算案が提案され、承認された。

（1）　収入の部

項　目	17 年度予算	18 年度予算	内　訳

会　費	320,000 円	456,000 円	会員（95 名を見込む）
寄付金・カンパ	100,000 円	80,990 円	寄付金・カンパ
利　子	150 円	10 円	ゆうちょ銀行
研究誌販売	150,000 円	100,000 円	紀要「語りの地平」
講習会	0 円	80,000 円	3 回開催予定
研究相談	0 円	9,000 円	随時対応（3,000 円/回、3 回予定）
合　計	585,150 円	726,000 円	

＊「賛助会員」の項目については削除。

（2）　支出の部

項　目	2017 年度予算	2018 年度予算	内　訳
総会費	10,000 円	5,000 円	年次総会
文献資料購入費	10,000 円	5,000 円	研究所のアーカイブ文献資料
研究誌作成費	250,000 円	310,000 円	紀要「語りの地平」発刊（せりか書房）
研究会開催費	15,000 円	15,000 円	夏季研究会開催
事務用品費	10,000 円	45,000 円	文具・NL・資料整理用品・プリンタ等
ホームページ管理費	20,520 円	20,520 円	Xserver・ドメイン料金
通信費	20,000 円	30,000 円	切手代
研究所消耗品費	10,000 円	30,000 円	洗剤・テッシュなどの日用品
研究所維持費	120,000 円	146,000 円	水道光熱費・インターネット代金など
会議費	90,000 円	90,000 円	運営委員会等の交通費補助
年会費	3,000 円	3,000 円	社）水俣病センター相思社
税　金	21,000 円	21,000 円	法人税
予備費	5,630 円	5,480 円	
合　計	585,150 円	726,000 円	

(5)その他

とくになし。

４．報告事項

『語りの地平』3 号のエントリー状況、講習会の参加要件に関する要望（なるべく新しい受講希望者を受け付けるように、という意見など）、資料整理として、中野卓調査資料の進捗状況など報告された。

総会終了後、懇親会。T さんの手料理で、岐阜で購入してきた飛騨牛のスキヤキを堪能した。

第 3 回　ライフストーリー講習会

2018 年度第 1 回講習会

ライフストーリー調査研究の基本概念と考え方（入門編）

が開催されました。

2018 年 7 月８日、前日まで、西日本を中心に「観測史上初」の豪雨に見舞われ、多くの命が犠牲になった。毎年、梅雨末期にはこうした災害に襲われることが多いが、最近はとくにひどい。講習会への参加予定の名古屋から以西に住む数名の方も、交通機関がストップして欠席。7 名の受講者とスタッフ5名で、開かれた。議論を交わすという所まではできなかったが、インタビューの始め方や「データ」を前に悩んでいることなど、参加者の素朴な疑問、質問に答える形で進められた。午前、1. ライフストーリーとは何か。昼食には牛スジカレーとサラダがふるまわれた。午後、2. 参加者の関心とインタビューの方法、3. 語り手との関係、配付資料を読んで、などを討議して、17:00 に終了。その後、スタッフが用意した 1 日遅れの七夕飾りに願いを書いた短冊を付けた。

以下に、参加者のコメントを 2 点について記す。

(1)　わかったこと、良かった点

自分の研究が進むと勉強会の内容が具体的になりおもしろい。／自分の調査データを今後、どのような視点で論文化していくとよいか見えました。／LS の概要はわかりました。個別性、相互性、構築性を意識できた。／自分の研究が LS 法に合致しているかどうか、何を大切にして分析することが重要か、わかった。／どれもこれも確認できてよかった。語りの構成の図を見て何を研究するのかが理解できた。／論文記述の仕方、理論的部分／理解が深まった。自分の研究でライフストーリーを用いる意味をあらためて確認できた。

(2)　疑問点や今後深めたい点

調査倫理の問題／実際のデータ分析と論文執筆／TS の具体的分析、対話的構築主義から多元性を

見ていくこと／最終的に論文記述の方法／具体的な研究の進め方／どう分析するか／通訳者との関係などの課題。

ライフストーリー研究会

第4回夏期研究会

開催日:2018 年 8 月 26 日(日)

開催場所:(社)日本ライフストーリー研究所

報告者募集!!

申込み締め切り:8 月 6 日

夏期研究会開催のお知らせと報告者の募集です。今年は、以下のようなプログラムを予定しています。報告者を3名、募集します。メールで、報告タイトルをお知らせください。一人の報告者の持ち時間は 100 分で、報告時間が 50 分、質疑の時間が 50 分となっています。配付用レジュメおよび資料は、前日までにお送りくだされば研究所で用意します(当日の場合はご自身でご用意ください)。

午前の部 (10:30～12:10)
- 第 1 報告

午後の部 (13:30～17:00)
- 第2報告
- 第3報告

懇親会(17:00～18:15)

確定プログラムは、8 月 10 日頃にメールでお知らせします。

＊終了後、懇親会を行います。(参加費無料)

＊JR 小淵沢駅もしくは高速バス小淵沢バス停まで送迎します。小淵沢駅 10 時 10 分に集合してください。

＊参加希望者は、送迎の都合もありますので、8 月 15 日頃までに所定の用紙で申し込んでください。メール連絡も可能です(氏名、送迎希望の有無、連絡用携帯電話番号などを明記してください)

ライフストーリー調査研究

講習会(4)

2018 年度第 2 回

11 月 11 日(日)

インタビュー実践の課題と調査倫理

参加者募集!!

(先着順受付)

- **開催日時:2018 年 11 月 11 日(日)10:30～16:40**
- **開催場所:(社)日本ライフスートリー研究所**
- **講師:桜井　厚(本研究所代表)**
- **参加費:会員 3, 000 円、非会員 4,500 円**

・**定員：10 名**（先着順で受付、定員になりしだい締め切ります。なお、オーバーした場合、2 回目を翌週に開講します）

本年度第 2 回の講習会を開講します。第 1 回の講習会では、ライフストーリーの基本的な考え方を討議しましたが、本講習会では、その考え方を基礎にして、語り手と出会い、インタビューにおける語り手との相互行為の諸相やトランクリプトの作成における注意すべき点や課題を洗い出し、そのうえで語り手との関係に関わる調査倫理について解説、討議します。

講習会プログラム予定

＊資料の配付：開講日 1 週間前にメールで参考資料を配付します。

Ⅰ．ライフストーリー・インタビューの考え方（10:30～12:10）：聞き方、語り手にとっての調査者、調査者の自己概念、当事者研究とは何か、語り手/聞き手関係、語りのなかのリアリティとは何か、語りの構造。

＊昼食（12:10～13:00）：スタッフの都合により、弁当持参をお願いすることがあります。飲み物は研究所で用意します。（従来、ランチを提供してきましたが、当日ランチ提供の可否については参加者に直接通知します）なお、近隣のレストランでの飲食は、送迎できませんので、避けてください。

Ⅱ．インタビュー・データの解読と利用（13:00～14:40）：参加者の関心紹介と質疑、具体的データから何を読み取るか、TS の利用法、データ数、データのチェックと匿名性。

Ⅲ．語り手との関係における調査倫理（15:00～16:40）：各学会の調査倫理の紹介、倫理的課題の整理と考え方、関係論文の紹介、調査倫理委員会への提出書類の書き方など。

◎参加希望者は（社）日本ライフストーリー研究所のメールアドレス info@lifestory.or.jp からお申し込みください。申込み締め切りは、**10 月 21 日（日）**です。申込みは先着順で受け付けます。

◎**定員 10 名**に達し次第、締め切りますが、定員をオーバーした場合は、開講予備日として 1 週間後の **11 月 18 日（日）：定員 10 名（5 名以上で開講）**を予定し、あらためて申込者に確認の上、申込みを受け付けます。開講するのは、11 月 11 日（日）の申込者が定員を上回った場合だけです。なお、講習内容は 11 日と同じです。

◎申込みを受け付けたら申込書をメール添付でお送りします。必要箇所を記入して、返送していただいて受講申込みが完了します。

＊送迎：JR 中央線小淵沢駅――本研究所間を送迎します。迎えは、新宿から着く特急の時間に合わせ、10 時 10 分に小淵沢駅を出発します。早めに到着した場合も，その時間までお待ちください。また、帰りは、個々の希望に合わせて送ります。
＊東京や名古屋からなら日帰りは可能です。
＊研究所内の宿泊が数名なら可能です。
＊近隣に多くの宿泊施設があります。送迎します。

寄贈いただいた論文、著書、報告書

2018 年 5 月～7 月　下線の著者は本研究所会員

●森岡清美「沢柳政太郎「卑見」について」『成城学園百年史紀要』第 4 号、2018 年 3 月

●橋本みゆき・猿橋順子・髙正子・柳蓮淑「食における在日韓国・朝鮮人 1 世・2 世の生活文化継承――2014 年大阪調査からの予備的考察」『アジア太平洋研究センター年報』2014-2015

新入会員（2018 年 5 月以降、順不同）

山本　壮則（国立精神神経研究医療センター病院・看護師）
伊吹　唯（上智大学大学院生）
岡島　志野（首都大学大学院生）
張　嵐（中国広州市、暨南大学）
亀崎　路子（杏林大学）
杉野　衣代（お茶の水女子大学大学院生）

＊経費節減と郵送作業軽減のため、ニュースレター.pdf のメール配信による受取りにご協力いただける方はご一報ください。
＊研究相談を受け付けます。メールでお問い合わせください。

（社）日本ライフストーリー研究所
〒408-0032 山梨県北杜市長坂町大井ケ森 1176-489
E-mail: info@lifestory.or.jp HP: http://lifestory.or.jp